

# 上野早生(うえのわせ)

登録番号：第915号

育成者：上野寿彦

登録年月日：昭和60年7月18日

来歴：「宮川早生」の枝変わり

登録者：上野寿彦（佐賀県東松浦郡  
浜玉町南山2338-1）

## 特性

「上野早生」が名乗りをあげたとき、故郷の佐賀県では、同じ熟期の「大浦早生」が登録品種になっていた。当時、外観は「大浦早生」が立派だが食味は「上野早生」が良いというのが下馬評であった。試験場で調査の結果、「上野早生」の方が減酸が早いことが明らかとなり、登録の運びとなった。

減酸は早いですが急激な酸の低下は起こらず、糖が多くて食味が濃厚であるため、出荷期間が長いこと、その上樹勢が旺盛で栽培しやすいなどの長所が買われて、静岡、神奈川を除く各県に広がり、「宮本早生」とともに全国区の極早生品種となった。「宮本早生」は減り、本品種は増えているので、やがて日本一の極早生になるであろう。

樹姿は開張性で、樹勢は「宮川早生」よりも強く、結果性も良好だから、極早生の中では最も作りやすい品種である。

9月下旬に2～3分着色。「宮川早生」よりはずっと早いですが、極早生の中では遅い方である。果形指数は130～135で、「宮川早生」に比べ、同等かやや扁平。減酸と着色が早い点を除けば、「宮川早生」によく似ている。樹上に置けば糖が増し、じょうのうが薄くなる完熟型であるから、10月上旬から11月まで出荷できる。果実の大きさもM、L中心で落ち着いており、浮皮にはならない。味の濃厚な小果を樹上に置く完熟果出荷も可能である。

本品種の発生地浜玉町は日本一のハウスミカン産地だが、本品種をハウスミカンに利用し、早期出荷や省エネルギーの実効をあげている。

本品種は、いわゆる早出し地帯で9月の早出し出荷をねらう品種ではない。一般の早生温州地帯で、これまでの「宮川早生」や「興津早生」に代わり、10月上旬から11月にかけて、完全着色し味ののった果実を生産する品種である。現在も全国的に増え続けているから、大きく品種地図を塗りかえる主役になるであろう。

(岩政正男)